

# 「暮らしの中の道祖神」

無病息災や縁結びの神として親しまれている道祖神は、男女（神）の姿が彫られた双体道祖神がよく知られています。この像碑は松本平に濃密に分布していますが、江戸時代を通じて松本城下町に建立されなかったことは意外に知られていません。文化の境界ともいわれる梓川。その北に広がる安曇野一帯の道祖神御柱祭りも、地域特有の文化です。地域の中の祭りと行事や道祖神を中心とした人々の精神的な安穩、暮らしの中の素朴な祈りについて考えてみます。

## はじめに

松本平―筑摩野から安曇野にかけての一带は、「道祖神のふるさと」と呼ばれ、男女二神の姿が彫られた双体道祖神碑が多くまつられている。長野自動車道を松本から長野方面に進むと、梓川を越えて安曇野市に入る。安曇野市のカントリーサインは北アルプスとそこから流れ出る清流、そして双体道祖神碑がデザインされている。松本平が道祖神と深く結びついたイメージは、昭和五〇（一九七五）年放映のNHK朝の連続テレビ小説「水色の時」の影響が大きく、とりわけ安曇野は「水色の時」道祖神」が建立されるなどし、多くの人々が道祖神に引き寄せられるようになったといわれる。残念ながら、筆者はこの「水色の時」を視聴していないのだが……。

ところで、道祖神とはどのような神なのだろうか。境の神の総称で、ドウソジンと呼ばれる神をはじめ、サエノカミ、サイノカミ、ドウロク

# 松本城下町の道祖神信仰

### 木像祭祀から道祖神碑建立へ

#### 窪田 雅之

れたものである。

## 城下町で道祖神木像をまつる

では、道祖神信仰はどのような広がりをみせたのだろうか。

まず、平成の大合併前の旧松本市域の道祖神碑建立の様子をみてみよう。明治以前のもので建立年が明らかかなものは一三九基ある。最古とされるものは今井古池の正徳五（二七二五）年であるが、道祖神碑の建立は一七〇〇年代後半から増え始める。十年ごとのスパンで建立の様子をみると一七六一〜七〇年に三基、一七七一〜八〇年に六基、一七八一〜九〇年に七基建立されている。さらに一七九一〜一八〇〇年に二九基、一八〇一〜一〇年に二七基とピークを迎えた。その後、一八二一〜三〇年と一八四一〜五〇年にそれぞれ十四基が建立され小さなピークを迎えた。このように村々では一七〇〇年代後半から道祖神碑の建立が増えている。この時期、松本平では村落共同体がほぼ確立し、村々の経済的余裕が生じた結果、道祖神碑が建立され始めたのだろう。

松本城下町がほぼ完成をみたのは一七〇〇年代前半、水野氏時代であ



写真1 和泉町の道祖神木像 (松本市立博物館所蔵 国重要有形民俗文化財)

る。城下町周辺の初期の道祖神信仰の様子はわからないことが多いが、農村地帯では道祖神の信仰が定着し、祭りが始まったのであろう。道祖神祭りの始まりもいつ頃なのかわからないが、文化四（一八〇九）年には松本藩から禁令が出されている。問題視されたのは、子供たちが大勢集まって道辻に縄を張り、往来の人や馬を止めて賽銭をねだる道祖神祭りであった。次に、城下町の道祖神祭りの様子を見てみよう。天野信景が『塩尻』に信州松本の人から聞いたとして次のように記している。『塩尻』は元禄期から享保期、一六〇〇年代末期から一七〇〇年代初頭まで、口頭伝承も含めて書き継がれた随筆である。松本の城下町の町々の辻に長さ十間ばかりの大きな柱に松竹などを飾って立ててこれを御柱と呼び、また幸神とも称していると。幸神とあるのはこれは柱を立てる道祖神祭り、『本町高美家日記』に文化十四

ジンなどと呼ばれる神を含み、長野県では集落の境や辻などの路傍に石造物の形でまつられることが多く、ムラ（境界）の守り神・縁結びの神・豊作の神・性愛の神・子ども守り神などとして先人から信仰されてきた。松本平では縁結びの神とされるところが多いが、まつる地域や人々によってその性格は一様ではない。先人が様々な願いを込めた道祖神は広くまつられ、願いの対象となる石造物―道祖神碑の形は自然石や「道祖神」「道陸神」などの文字を刻んだもの（以下「文字碑」）、男根・女陰を模した陰陽石、そして男女二神の姿などを彫った双体像碑（以下「像碑」）などがある。一般に道祖神というと、この像碑を指すことが多い。もっとも、道祖神碑が建立されたのは松本城下町を除く周辺の村々であった。江戸時代を通じて城下町には道祖神碑が一基も建立されず、道祖神はムラの神であったのである。また城下町のいくつかの町とその隣接地帯・農村地帯の一部では道祖神木像（以下「木像」）がまつられていたことはそれほど知られていない。筆者は市民や観光客から「松本の街中にもあちこちに道祖神があるじゃないですか」とよく質問されるが、これらは一九七〇年代以降に建立さ